岩手県立博物館研究報告　第31号　2014年3月　25～36ページ
Bulletin of the Iwate Prefectural Museum, no. 31, pp. 25～36, March, 2014

平泉町花立Ⅱ遺跡出土の瓦について（その１）

鎌田　勉

岩手県立博物館　020-0102　盛岡市上田字松屋敷34　Iwate Prefectural Museum, Morioka 020-0102, Japan.

はじめに

岩手県域が入る陸奥国北部において、平安時代の瓦が出土する遺跡は、奥州市の胆沢城跡・明後沢遺跡群（明後沢古瓦出土地）・瀬谷子窯跡群、北上市の国見山廃寺跡・白山廃寺跡、平泉遺跡群などである。それらは官衙跡や居館跡、寺院跡、生産遺跡と推定される場所であり、岩手県域では一般的な集落遺跡で古瓦片が出土することは稀である。

12世紀奥州藤原氏関連の遺跡で構成される平泉遺跡群では、各遺跡で古瓦片の出土が報告されている。その中で瓦片が比較的多く出土し、文様の分かる軒瓦片が出土する遺跡は、柳之御所遺跡・中尊寺伝大池跡・花立Ⅱ遺跡・志羅山遺跡・泉屋遺跡・鈴沢瓦窯跡等・花立廃寺跡である。数点の瓦片ならば本来の出土地からの移動の可能性があるが、もともと量的に少ない軒瓦片が出土する遺跡については、その場所に瓦を用いた建物が存在した可能性を考えることができる。寺院の忌言葉が瓦葺とされるほど寺院と瓦は密接な関係にあるが、平泉遺跡群で寺院跡であることが確実な、伝大池跡以外の中尊寺境内、毛越寺跡・観自在王院跡・無量光院跡からは12世紀の瓦はほとんど出土しない。これは、12世紀平泉において瓦を用いる建物が必ずしも寺院に限定されていたのではなく、ある意図をもって瓦が用いられ、ある特定の時期に瓦が製作されていた可能性を考えることができる。

平泉遺跡群で特に瓦の出土量が多い場所は、柳之御所遺跡堀内部地区と中尊寺伝大池跡である。両遺跡は瓦出土の総量が多いだけではなく完形・準完形の軒瓦が出土している。平泉遺跡群では、これまで検出された瓦の一括廃棄遺構は1遺構（柳之御所遺跡第13次調査区の井戸跡）だけであり、完形・準完形の軒瓦の出土は数量的に多くない。柳之御所遺跡・中尊寺伝大池跡の場合、瓦の年代・系譜を最も特徴づける軒瓦の文様は、巴文と剣頭文を主体とするものである。軒丸瓦は、内区に陽刻ないし陰刻の三巴文、外区に陰刻ないし陽刻の剣頭文を配するものが主体である（陰刻三巴文・陽刻剣頭文の間に連珠文が配される）。その他に、三巴文のみのもの（陽刻あるいは陰刻）、三巴文の外側に連珠文が配されるもの（陽刻のみ）、全体像は不明だが複弁蓮華文が配されるもの、宝相華文系の文様が配されるものがある。軒平瓦は、陽刻の剣頭文のみのもの、陽刻の剣頭文の上に連珠文が配されるもの、陽刻の巴文と陰刻の剣頭文が配されるものがあり、陰刻の剣頭文のみのものが少数ある。その他に、唐草文系の文様や陽刻の三巴文のみが配されるものがある。これら軒瓦に共通するのは陽刻の二重圏線である。すべての軒瓦に配されるわけではないが、二重圏線の入る平安時代の軒瓦の類例は少なく、平泉産の瓦に共通する意匠として用いられた可能性がある。

観自在王院跡東辺から東へ50mほどの場所に鈴沢瓦窯跡がある。昭和50年3月の区画整理事業に伴う発掘調査で、北に面する斜面地に2基の窯跡が発見され、窯跡埋土から多くの瓦片が出土した。その中には完形の陰刻三巴文・陽刻剣頭文軒丸瓦が含まれていた。それらは中尊寺伝大池跡等で出土する瓦と同じ文様であることから、12世紀の瓦窯跡と判断され遺構の確認のみで現状保存された。窯跡内部の精査が行われなかったことから詳細は不明だが、略報（平泉町教育委員会1974）によれば西側の窯は状態不良、東側の窯は窯壁が残り埋土にかなりの瓦片が含まれていたということである。鈴沢瓦窯跡の存在から、平泉遺跡群内で出土する12世紀の瓦は平泉産であることが確認された。

平安時代後期、平安京の宮殿や寺院、邸宅等の屋根を飾った瓦は、従来の山城国官窯系の瓦窯の瓦に加え、讃岐国・播磨国・丹波国・大和国・尾張国・河内国等から搬入された瓦が用いられた。一度に多くの量を必要とする瓦は、総量としては重量物ではあるが個別の製品の移動は可能である。しかし、鈴沢瓦窯跡で製作された巴文・剣頭文系の瓦は搬入品ではなく、奥州藤

原氏が瓦の専門工人を招聘して平泉で瓦を作らせたものと推測される。その瓦専門工人は鎌田1994・2006等により山城国幡枝系の瓦専門工人を主体とするもので、平泉での出張製作の年代は1160年代と推測されている。

12世紀平泉遺跡群出土瓦の主体は巴文・剣頭文系の瓦と考えられてきたが、それらの範疇に入らない軒瓦が存在する。古い事例では、岩越二郎氏採集の宝相華唐草文軒平瓦が知られている（岩越1958）。志羅山遺跡・泉屋遺跡でも同様の軒平瓦が少量出土しており、毛越寺跡の東側から志羅山遺跡周辺で、宝相華唐草文系の軒平瓦を用いた建物が存在した可能性がある。

山城国幡枝系瓦工人による巴文・剣頭文系の軒平瓦は、半折曲技法あるいは折曲技法によるもので技法的な統一性がある。一方、宝相華唐草文系の軒平瓦は、基本的に半折曲技法による成形であるが技法的にばらつきがある。文様も統一性がなく、中尊寺金色堂内に見られる宝相華文よりも退化した印象がある。上原真人氏は、宝相華唐草文系軒平瓦は金色堂の宝相華文をモチーフとしたもので、平安京の瓦との関係性は低く、平泉内で技法的な変化があったものであり、清衡晩年の瓦と推測している（上原2001）。年代・系譜は今後細かく検討する必要があるが、2代基衡が開発した地区であることを考慮して、巴文・剣頭文系の瓦に先行するもので、12世紀中葉までに限定的に用いられた瓦と推測されている。

以上のように、12世紀平泉の瓦は2代基衡（清衡晩年）から3代秀衡のころのもの考えられてきたが、平成12年に初代清衡の時代に遡る可能性のある瓦が発見された。花立Ⅱ遺跡第13次調査で発見された瓦の一群である。出土した瓦は巴文・剣頭文系の瓦と比べかなり大ぶりであり、黒く燻された瓦片が多く、調査途中で軒瓦が出土しない段階では中世から近世の瓦と考えられていた。出土した瓦は調査区内では最も古い遺構に伴うものであり、巴文・剣頭文系の瓦は含まれていない。数少ない軒瓦片は平泉では未知の唐草文系の文様であり、文様・製作技法から平安京の瓦との共通性は明らかであった。花立Ⅱ遺跡第13次調査区は花立廃寺跡に隣接しており、花立廃寺跡の建物跡からも瓦がまとまって出土していることから、金鶏山東麓の花立廃寺跡から花立Ⅱ遺跡までの場所で、瓦を用いた建物が存在していたことが想定される。

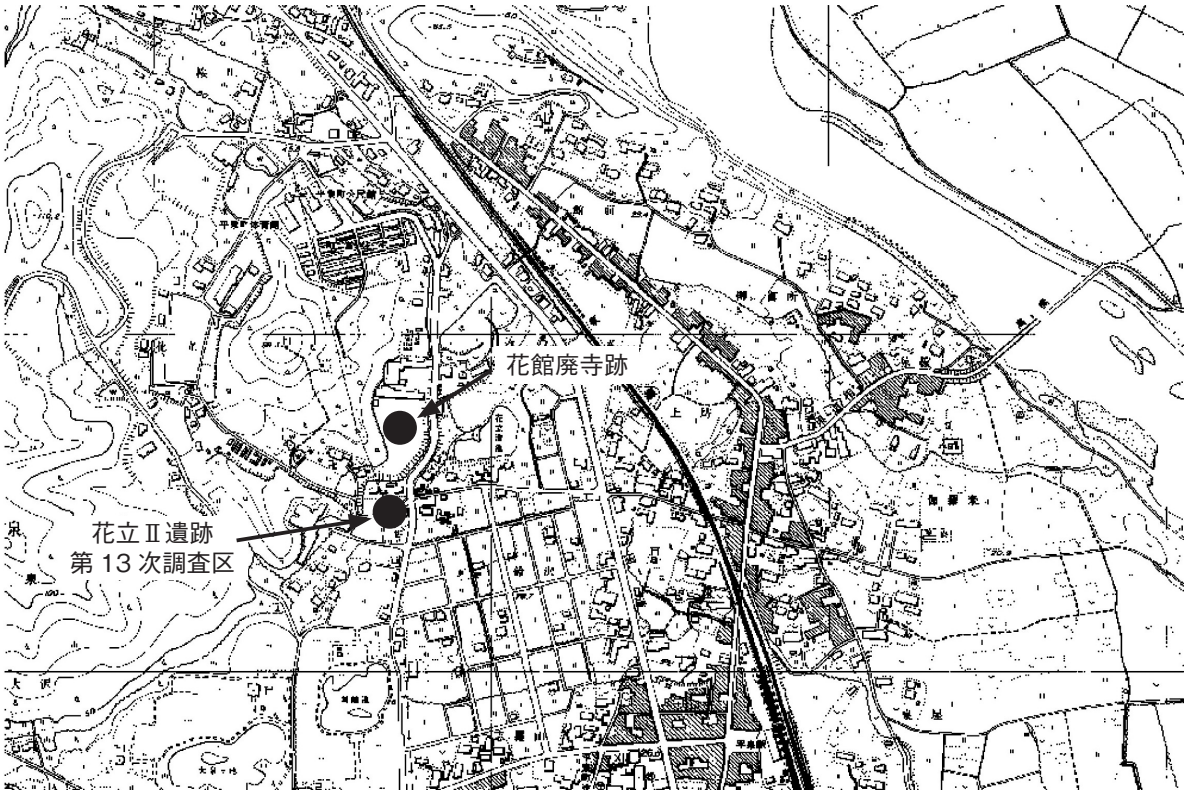
本稿（その1）では、花立Ⅱ遺跡第13次調査区（・花立廃寺跡）の調査状況と出土瓦の検討を行い、次回（その2）以降で花立Ⅱ遺跡で出土した瓦の年代と系譜、使用の在り方について検討してみる。すでに、花立Ⅱ遺跡の瓦については、上原真人氏が軒瓦の年代・系譜について論じているが（上原2000・2001）、報告書未刊行ということもあり総括的な論考はない。瓦の年代・系譜は上原氏の考察に準じて、主に平安京所用瓦との比較を行うこととする。また、花立Ⅱ遺跡第13次調査区と花立廃寺跡との関連性を検討し、瓦使用の在り方と文献等を参考にしながら瓦存在の意味について若干の考察を行いたい。

1　花立Ⅱ遺跡の調査状況

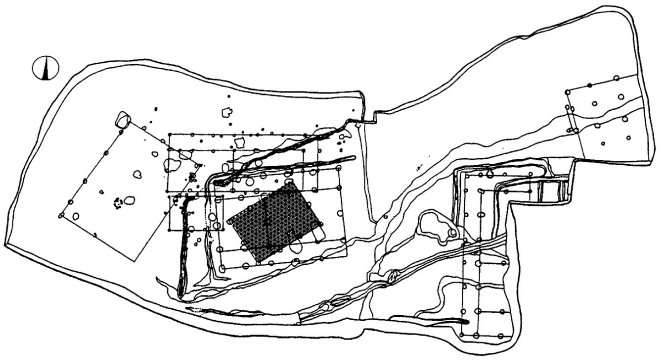
花立遺跡は、観自在王院跡東辺に拡がる志羅山遺跡の北側、無量光院跡・白山社遺跡の西側に所在する遺跡である。市街地中央部で広い面積を占めるため、遺跡地図上の都合で北西部を花立Ⅰ遺跡、南東部を花立Ⅱ遺跡に分けられており、花立廃寺跡は花立Ⅰ遺跡に包含される。花立Ⅱ遺跡では、これまで個人住宅や公共施設建設に伴う発掘調査が行われてきたが、遺構としては溝跡や土坑等が中心であり、寺院跡等や有力者の邸宅跡を示す大型の建物跡等は発見されていない。

花立Ⅱ遺跡第13次調査区は、花立廃寺跡の東から南側の裾を取り巻く花立Ⅱ遺跡の西端に位置する。発掘調査は平泉健康交流福祉施設建設に伴うもので、調査対象面積約1,500㎡、平成12年2月1日から4月22日まで行われた。発掘調査報告書は未刊行のため、調査の状況は主に平成12年度平泉町内遺跡調査の特別展図録（平泉町等2000）の記述を基にする。

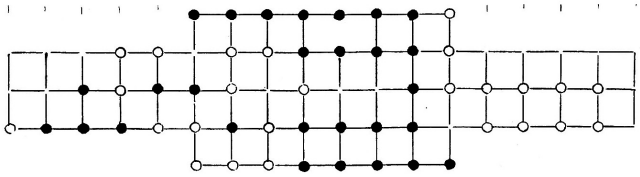
調査前の状況は、南東に向かって下る緩斜面地の台地を切り土・盛り土造成して2筆の水田に利用されてきた。本来の地形が北西側から南東側に緩やかに下る斜面地であり、調査区北西側は地山面が削平されていたが、調査区中央部から南東部の広い範囲は盛り土されたため、12世紀末から13世紀初頭頃の遺物包含層が保存されていた。検出された遺構は、中世の礎石建物跡1棟と12世紀代の掘立柱建物跡6棟、溝跡4条、土坑4基、石敷き面と中島をもつ池跡である。出土遺物は、12世紀のかわらけや陶磁器片のほかに瓦片が多数出土している。瓦は広域な遺物包含層を中心に最も古い掘立柱建物跡周辺、池の埋め土から出土し、破片数は2,000点以上にのぼった。その他に中世後半以降の陶磁器片や縄文時代の石器等も出土している。



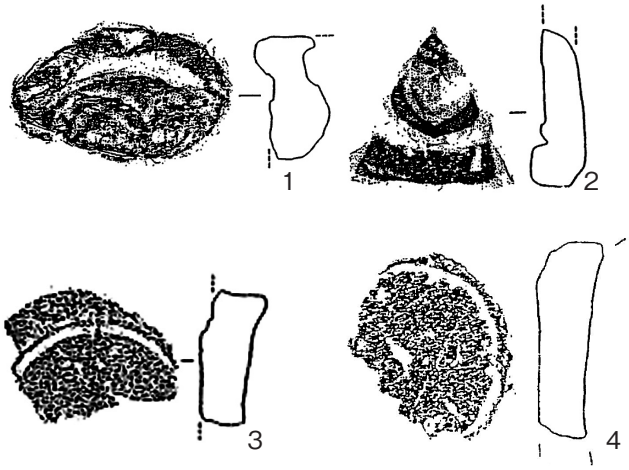
花立Ⅱ遺跡第 13 次調査区位置図

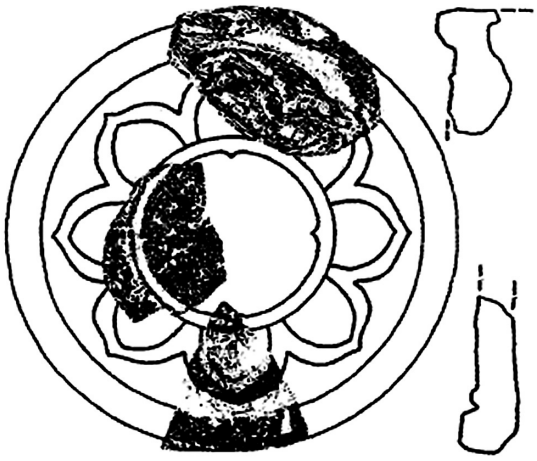


花立Ⅱ遺跡第 13 次調査区遺構配置図
網掛部分が第Ⅰ期建物（建物Ａ）



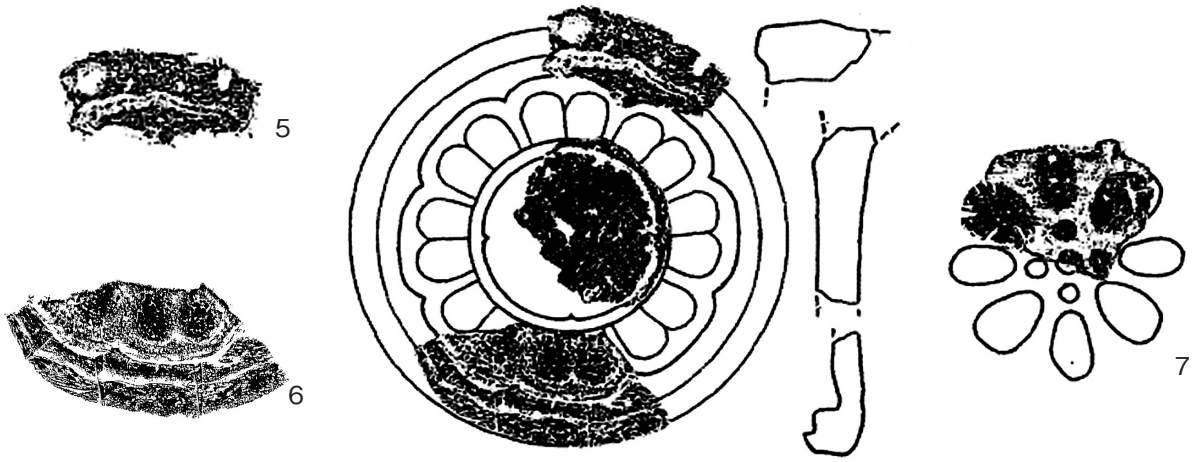
花立廃寺跡礎石配置想定概念図
●：礎石残存　○：根石・グリ石



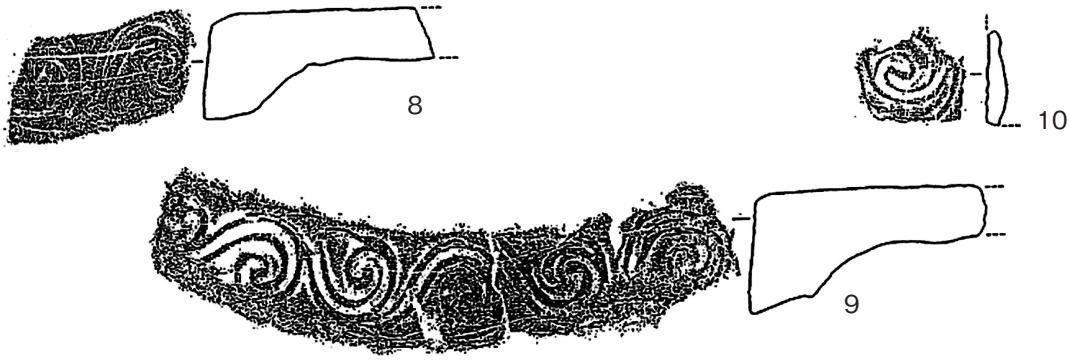


軒丸瓦Ⅰ復元想定図（上原 2001）

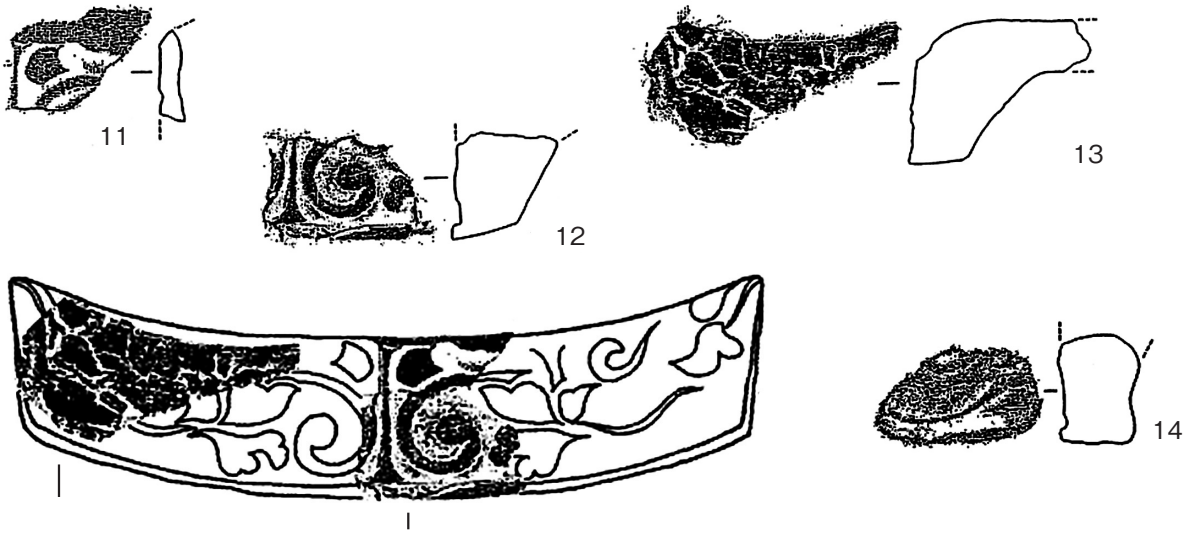
図１　花立Ⅱ遺跡の位置と花立Ⅱ遺跡出土瓦　　１～４：縮尺 1/3（本澤 2000）



軒丸瓦Ⅱ復元想定図（上原 2001）



軒平瓦Ⅰ



軒平瓦Ⅱ復元想定図（上原 2001）

図２　花立Ⅱ遺跡出土瓦　　５～17：縮尺 1/3（本澤 2000）

建物跡は４期ほどの変遷があるが、瓦は最も古い段階の建物跡に用いられていたと考えられている。建物跡の新旧関係は柱穴や土坑の切り合い、遺物包含層の堆積状況から推測されたもので、Ⅰ～Ⅲ期が12世紀代、Ⅳ期が中世（室町時代）としている。Ⅰ期の建物Ａは３×２間の掘立柱建物跡で、１間は2.4mほどである。Ⅱ期は建物Ｂと建物Ｆ､中島を伴う池跡である。建物Ｂは５×２間の掘立柱建物跡で、北と南に庇がつく二面庇である。１間が2.3mで庇部分は1.8mである。建物Ｂの柱穴３個に瓦が入れられていた。瓦は柱穴の底に敷き詰めるような形で置かれていたようである｡柱穴底の瓦は､柱を安定させるためのものであったろうか。建物Ａと建物Ｂは重複しており、建物Ａ廃絶後に建物Ｂが建てられている。建物Ａの屋根に葺かれていた瓦の一部を、建物Ｂを建てる際に柱穴底に置いたものと推測される。Ⅲ期は建物Ｃ・Ｄ・Ｅの３棟が該当する。いずれも掘立柱建物跡で、建物Ｃは６×２間で北と東に庇がつく。１間が2.2m、庇が1.5mを測る。建物Ｄは３×２間、１間1.7mの小規模な建物である。建物Ｅは建物Ｃと同形式であるが、１間が2.4mとやや大きい。建物ＣとＥはＬ字型に庇がつく特徴がある。Ⅳ期は建物Ｇで礎石建物跡である。削平されている礎石があるが、３×２間の身舎の四面に庇がつく建物である｡身舎の桁行は2.3m－2.5m－2.3mと中央間が広い。

Ⅱ期とされる池跡は、調査区外に拡がるため全体規模・形状は不明であるが、護岸を伴わない素掘りの池で、不整形な中島があり、北側に平坦な玉石敷き面が広がっている。池跡と建物Ｅは重複しているので、池が廃絶した後にⅢ期の建物が建てられたと考えることができる。平泉町等2000によれば、出土した瓦は全体的に粗雑な大型の造りで、完全な形をとどめる瓦は１点もなかったということである。軒丸瓦は蓮華文系、軒平瓦は宝相華唐草文系の文様で、巴文・剣頭文系の瓦は１点も発見されなかった。

２　花立廃寺跡について

花立廃寺跡は、花立Ⅱ遺跡第13次調査区から沢を挟んで北側の台地上に位置する遺跡である。『封内風土記』（安永四年書上）巻之二十下に「花立遺址､伝云、古昔金峯山神事、立造花處」とあり金峯山社があったことが記されているが、現在は地名から花立廃寺跡と呼ばれている。花立の地名は、金鶏山麓で奥の大道らしい道より5m程の高さの丘があったことに基づくとされる。丘の東端に突き出したところは、西行法師が吉野の桜に比肩するものとした束稲山の桜の花を造花として立てた神輿の御旅所との伝承がある。礎石の残るこの台地は東西は狭いが南北は広く、その南北の広い敷地に寺跡をとどめる。その北に隣接して平泉文化遺産センターがある。北方にあった熊野神社は道を隔てて東の丘に移り、その場所にあった三十三間堂の伝承地はその所在を確かめることは難しいようである。

花立Ⅰ遺跡（花立廃寺跡）では昭和25年に発掘調査が行われ、七間四面と推定される礎石建物跡が検出された。母屋・庇とも柱間約14～15尺でほぼ等間であり、毛越寺嘉祥寺跡と並び12世紀平泉で最大規模の建物跡である。礎石建物周辺から瓦片が多数発見された。出土品は県立一関第一高等学校で保管していたが、昭和35年６月の校舎の火災により瓦類はすべて焼失してしまった。本澤2000は、報告書の拓影をみると宝相華唐草文の瓦と推測されるとしている。また、花立廃寺跡の立地面より一段下がった北側隣接地でも、小規模の礎石建物跡と近代の溝跡から瓦数十点が出土しているようである。

『封内風土記』は花立廃寺跡の場所を金峯山社としているが、それは、『吾妻鏡』「寺塔已下注文」の「中央惣社。東方日吉、白山両社。南方祇園社、王子諸社。西方北野天神、金峰山。北方今熊野、稲荷等社也」の記述を基にしたものと考えられる。平泉町教育委員会1987もこの金峰山社説を採用し、金鶏山を背景にした神仏習合遺跡と考えている。一方、藤島1995は、花立廃寺跡の建物を熊野神社長床（福島県喜多方市）のような行場と推定している。金鶏山は金峰山とも呼ばれ、頂上には12世紀の経塚もあることから、位置的に金峰山社の可能性は考えられることである｡また、冨島2000は、発掘調査で確認された礎石建物跡は建築学的にみて金峰山社の遺構とみなす積極的な根拠はなく、中尊寺あるいは毛越寺に属する寺院跡とし、花立廃寺跡を『吾妻鏡』「寺塔已下注文」にある中尊寺釈迦堂と推測している。

冨島義幸氏によれば、花立廃寺跡は現在の中尊寺境内とは別の場所にあるものの、平安時代の寺院は醍醐寺・安祥寺のように山上・山下の二つの伽藍を備える寺院があり、必ずしも現在の寺域に限定することはないとし、花立廃寺跡のモデルを創建法成寺釈迦堂と推測している。モデルとなった法成寺釈迦堂は、万寿４

年（1027年）に造営された桁行13間の仏堂とされ、中央五間四面堂に左右各4間の廊が付く形式である。冨島2000はこの法成寺釈迦堂の建築が参照されていた可能性が考えられるとしている。創建法成寺は天喜6年（1058年）に焼失し、藤原頼通による再建では七間四面堂に改められている。同時代的には再建法成寺をモデルとするのが妥当のように思われる。

余談であるが、「御堂」とは法成寺の別名であり、創建者の藤原道長を指す言葉でもある。「寺塔已下注文」では無量光院を「新御堂」と号すと述べている。新御堂があれば旧御堂があるはずで、旧御堂を花立廃寺跡と推定する説もある。釈迦堂と阿弥陀堂と異なるが、金鶏山経塚との位置的関係において、花立廃寺と無量光院の密接な関係を想定することは可能である。冨島2000は、花立廃寺跡を中心とする一帯を寺院とみなせば、花立Ⅱ遺跡第13次調査区は花立廃寺に関係する院家（Ⅱ期）や僧坊（Ⅲ期）と考えることができるとしている。

花立溜池は花立廃寺跡の道路を挟んで一段下にある人工の池であるが、花立廃寺跡とセット関係にあることはかねてから指摘されてきた。特に、前川2001は「両者は段差があるので、明確な囲いをもたない。しかし、昭和39年の都市計画図では、花館廃寺跡のすぐ南に金鶏山から延びる尾根が土塁状に突出している。この形状は毛越寺の西限土塁と類似し、区画としての意識が伺える。これを東へ延長すると、溜池南の直線上の土手へ向かう。東側の土手は曲線を描いており、南北に土饅頭状の高まりがみられ、築山かと判断された。花立溜池の取水は、瓜割清水のように、当時金鶏山東麓から湧き出ていた泉と考えられるが、高低差が約10mあるため、滝状の流れが想定される。また千手院方面からの流水も取水可能であろう。」とし、「金鶏山－花館廃寺－溜池は、雛壇状の構成となり、三者を視覚的に確認することができる。」「金鶏山と花館廃寺、花立溜池が雛壇状に並び、その下には鈴沢池が広がるというロケーションが想定できる。」と踏み込んだ想定をしている。

花立廃寺跡は花立Ⅰ遺跡の範囲に含まれるが、花立Ⅰ遺跡自体は奥羽山脈から続く小起伏丘陵東端の一つである金鶏山東麓で、花立山と呼ばれる丘陵の南斜面にあたる。昭和30年代の地形図では花立山は標高57.8mと記される。山頂部分が開墾や造成により地形は大きく改変され往時の姿は失われている。

平成19～20年に行われた花立Ⅰ遺跡第28・29次調査で3基の窯跡が検出された。調査は熊野三社の境内整備に係るもので、報告書（平泉町教育委員会2010）によれば、第28次調査で検出された1号窯跡からは、分焔柱の一部とかろうじて残った焼成室の床面近くから、碗・大碗・片口鉢・壺・甕が出土した。出土した陶器は素焼きのままであり製品は出土しなかった。検出された遺構は分焔柱をもつ瓷器系の窯跡で、窯の構造と出土遺物の様相から12世紀第1四半期の窯跡であり、渥美系の技術をもった工人や在地の瓦製作技法の関与が想定されている。窯跡からの炭化物でAMS法による年代測定を行い、平安時代後期の数値が得られている。第29次調査で検出された2・3号窯跡は、1号窯跡の東約10mで発見されたが、3号窯跡は形状と埋土から炭窯と推測されている。報告書では、花立山の南斜面にまだ複数の窯跡が存在すると想定している。

3　花立Ⅱ遺跡出土の軒瓦について

花立Ⅱ遺跡第13次調査で出土した軒瓦は、その推定される文様から軒丸瓦3種、軒平瓦3種に分類することができる。軒丸瓦は素弁八葉蓮華文軒丸瓦（軒丸瓦Ⅰ）、複弁八葉蓮華文軒丸瓦（軒丸瓦Ⅱ）、素弁蓮華文系軒丸瓦（軒丸瓦Ⅲ）であり、軒平瓦は偏行唐草文軒平瓦（軒平瓦Ⅰ）、均整宝相華唐草文軒平瓦（軒平瓦Ⅱ）、宝相華唐草文系軒平瓦（軒平瓦Ⅲ）である。以下、それぞれの特色・製作技法等について述べる。

軒丸瓦Ⅰ：図1－1・2の破片から推測する軒丸瓦である。花文は幅8㎜前後の凸線で表現されており、復元すれば8個の花文で構成される素弁八葉蓮華文と考えられる。図1－1は、遺物包含層南東区から出土したもので、表面が暗灰色、胎土は灰色を呈し精良、焼成は硬質である。これは、花文の凸線が剥落したものであり、瓦笵の凹形の花文部分に粘土を埋め込んでおき、瓦笵を押捺することにより8個の花文を貼り付けたものと推察される。図1－2は、東北斜面旧表土層から出土したもので、表面及び胎土色は淡黄灰色で、胎土は精良、焼成は軟質である。花文の先端は宝珠形に先端が尖っているのが特徴であり、中房に向かって緩やかな線を描いている。先端部はやや細く付け根の方はやや太くなっている。

全体を取り巻く圏線は、幅19㎜前後で幅が一定ではない部分があるが表面は平滑に調整されている。圏

線の上面には叩き具による縄目があるが、指ナデにより所々消されている。図１－２の裏面には丸瓦との接合部が明瞭に残っており、丸瓦部は厚さが2cm程である。軒丸瓦は瓦当部と丸瓦部からなるが、一本式ではなく接合式での成形であることが分かる。瓦当部と丸瓦部の接合後、指オサエによる調整を行い、瓦当部上面に及ぶ縦方向の叩きを施していると考えられる。また､指先により縄目を意図的に消している部分がある。瓦当裏面は指頭圧痕が見られるだけで、その他の調整は行っていないようである。

花弁部と中房部が連続する瓦片がないので確証はないが、図１－３･４が中房部の可能性がある。図１－３･４とも遺物包含層から出土したもので、３は表面・胎土色は淡黄灰色で､胎土は精良､焼成は軟質である。４は表面が暗灰～明灰色、胎土色は明灰色で、胎土は精良、焼成はやや軟質である。図１－３･４は軒丸瓦Ⅰ（素弁蓮華文）と軒丸瓦Ⅱ（複弁蓮華文）に共通する中房部で、ほぼ同じ形式と考えられる。花弁部と中房部は区画線はなく、蓮子も省略されている。中房外側の泉部は、花文のある花弁部より一段高く平らになっており、通常蓮子が描かれる中心部分はさらに一段高く平らになっている。図１－４で計測すれば、中房中心部の径は6.8cmである。図１－４の厚さは2.2～2.4cmで、裏面には指頭圧痕が多く見られる。

なお、上原2001は軒丸瓦Ⅰ及びⅡの中房部が４分割の木瓜形を呈しているとしているが、図１－３･４からは木瓜文の痕跡を観察することはできなかった。図１－３については拓本では木瓜文に見えるが、実物を詳細に検討した結果、砂粒の剥落した部分であることが確認できた｡中房中心部は平滑な面となっており、本来あった蓮子が剥落したとは考えられない。

図１－１～４は、同じタイプの軒丸瓦であるが表面色と焼成が異なる。特に、黒く燻された図１－１が本来の姿であり、図１－２は二次焼成を受けた瓦であると推測される。全体像は基本的に上原2001の想定する大型の軒丸瓦（径19.2cm程、図１－軒丸瓦Ⅰ復元想定図参照）となると思われるが、中房部の木瓜文はないものと考えるべきだろう。

軒丸瓦Ⅱ：図２－６は複弁の蓮華文であり、復元すれば８個の花文が並ぶ複弁八葉蓮華文と推定される。図２－６は建物Ａの柱穴28抜取り埋土から出土したもので、表面・胎土色とも淡黄色を呈し、胎土は精良、焼成は軟質である。複葉の花文は、外区の圏線と一体となった太い隆線で表現されており、木瓜形を呈している。花文を区切る線は描かれず、花文内の２個の種子は凸状の楕円形で表現されている。花文が陰刻で種子が陽刻で表現されているということになるだろう。圏線はみられないが、瓦笵を押捺した後に指オサエ等の調整を行っている。陰刻面から瓦当裏面までの厚さは1.2cmと薄く、裏面は指頭圧痕が顕著に残っているが、特に調整した痕跡はみられない。

図２－５は、遺物包含層中から出土したもので、表面・胎土色とも灰色を呈し、焼成はやや軟質である。この瓦片については、上原2001は複弁八葉蓮華文の一部と判断しているが、平泉町等2000及び金子2013は、素弁八葉蓮華文に分類している。図２－５の推定径は図１－１･２に共通するため、上原2001は軒丸瓦Ⅰと軒丸瓦Ⅱはほぼ同じ径として復元しており、両者とも径が19.2cmの大型の軒丸瓦を想定している（図２－軒丸瓦Ⅱ推定復元図参照）。一方、金子2013は図２－６のみで復元想定図を作成しており、それによれば軒丸瓦Ⅱの径は約17cmで、軒丸瓦Ⅰよりふた回りほど小さな軒丸瓦と想定している（それでも巴文・剣頭文系の瓦と比べればかなり大型である）。

なお､図２－５は外側の圏線のみで判断が難しいが、図２－６が木瓜形になるよう瓦笵が押されているのに、図２－５にはその痕跡が認められないこと、図２－５の圏線の幅が1.8～2.2cmと太いことから図２－５は軒丸瓦Ⅰに分類すべきと考える。中房部については、花文部から連続する瓦片が出土しないことから判断は困難であるが、前述のように軒丸瓦ⅠとⅡは中房部を共有すると推定し、図１－３･４が該当するものと推測する。軒丸瓦裏面や圏線周辺での指オサエ、指ナデが顕著であり､色調や胎土､焼成が近似することから、軒丸瓦ⅠとⅡでは技法的な共通性が高いと考えられる。

軒丸瓦Ⅲ：図２－７は軒丸瓦Ⅰ・Ⅱと比べかなり小ぶりである。砂粒を多く含む胎土で赤褐色を呈する。素弁の大小４個ずつの花弁が交互に配される。花弁は高く膨らんだ卵形のものである。中房部との仕切りはないが中央に１＋４の蓮子が配される。圏線や外区は不明であり、粗雑な造りであるが一応素弁蓮華文系の軒丸瓦と判断できる｡径はかなり小さいことが想定され、軒丸瓦Ⅰ・Ⅱとの技法的な共通点を認めることできない。

軒平瓦Ⅰ：左から右へ５単位の渦巻きが展開する（右偏行の）唐草文の軒平瓦である（図２－８～10)。特

に、図２－９は出土した軒瓦中で唯一全体像が確認できる点で貴重である。表面は黒灰色、胎土色は灰色～灰白色を呈し、少量砂粒を含むが胎土は精良、焼成は硬質である。色調・胎土・焼成は軒丸瓦Ⅰ（図１－１）と共通するように思われる。

図２－９の瓦当文様から、外側の圏線はなく瓦当面全体に文様が展開していることが分かる。文様は左側の種子２つが陽刻であるが、その他は縁取りによる陰刻で表現されている。陽刻と陰刻が違和感なく調和している意匠といえるだろうか。瓦当面上面はヘラ状の工具による面取りがなされている。平瓦部凹面は細かい布目が残るがそれほど明瞭ではない。砂粒が全面に付着しており、砂粒の上から指でナデ調整を行っている。瓦当面上面のヘラ調整は調整の最終段階で施されている。凸面は叩き痕跡は明確ではなく、横方向の指ナデと部分的に横位のヘラケズリの痕跡が認められる。端部を中心に指頭圧痕が認められるが、横方向の指ナデで消しそこなった部分と考えられる。

瓦当部の成形は軒平瓦専用の厚めの平瓦を用い、瓦当部に粘土を貼付けて成形している。凸面の頸部を指オサエにより粘土を瓦当部下部に移動させ顎を最終的に成形し、瓦当部下面を金属的な工具で横方向のケズリ調整を行っている。平瓦凸面の指オサエを行った部分は、他の平瓦よりも薄くなっている。

軒平瓦の側面をよく見れば、顎部と平瓦部のひび割れが確認できる。接合痕跡はヘラ削りにより消されているが、焼成時あるいは経年劣化によりひび割れが生じたものと思われる。このひび割れから、瓦当面に向かって平瓦がなだらかに薄くなっていることが分かる。瓦当部になる平瓦部分については、平瓦部よりも薄くして顎を貼り付けやすくしているものと思われる。平瓦部と瓦当部では厚さが半分くらいになっている。

図２－８は、文様の立体感が乏しく文様が明瞭に浮き出されていない。図２－９と同笵の瓦であり胎土・焼成も共通することは言うまでもないが、文様の凹凸が不明瞭で笵キズが見られることから、瓦笵の摩耗がかなり進んでいたことが推測される。特に、瓦当面表面に砂の移動痕跡が観察できることから、瓦笵押捺以前の調整痕跡が残るほどに瓦笵が弱かったことが推測できる。さらに、図２－10は瓦当面の右端部が剥落した小片であるが、図２－８・９と比べれば文様が明確である。図２－10の拓本・断面図は時計回りに90度ずれて掲載されているが、陰刻の唐草文の外側にもう１本の線があることが分かる。

軒平瓦Ⅱ：図２－11・12・13が組み合わされる大型の軒平瓦である。表面は黒灰色～灰色、胎土色は灰色で、胎土は精良、焼成も硬質である。瓦当面中央部とみられる図２－12に垂線があることから、左右対称の均整文系の瓦であることが分かる。図２－11・13から推測できる文様は、垂線を軸として左右対称に宝相華唐草文が展開するものである。中心部の渦巻き状の唐草文は、比較的明瞭に表現されている。全体の瓦当文様は、上原2001による図２－軒平瓦Ⅱ復元想定図のとおりになると考えられる。図２－11・12の表面には、平瓦凹面部から連続する布目が明瞭に残っている。圏線は文様下部と両サイドにあり、垂線と合流するが上部には表現されていない。

瓦当部は平瓦を成形台の上で折り曲げることによって成形されたと考えられる。折り曲げた後、瓦当部裏面に粘土を補充している。この部分はクリアな面取りで鈍角を作りだしている。折り曲げた平瓦端部にもクリアな面取りがなされており、金属的な工具により最終的な調整を行ったものと推測される。瓦当部折り曲げ成形により、瓦当面上部が鈍角となり圏線が表現されなかったと思われる。文様部にも平瓦部凹面から連続する布目が残っているが、瓦当部成形の際に布ごと折り曲げたことが考えられる。平瓦凹面にはやや粗めの布目が明瞭に残っている。平瓦部凸面は、縄目叩き痕跡にまず縦方向のヘラケズリを行い、その後横方向のヘラケズリが行われている。

軒平瓦Ⅲ：図２－14であり、唐草文系の軒平瓦と考えられる。表面・胎土色とも淡黄灰色を呈し、胎土は精良で軟質である。この瓦も二次焼成を受けたことが推測される。１点だけの破片のため文様復元は困難であるが、軒平瓦ⅠとⅡとは異なり、細く伸びやかな蔓が展開するようである。瓦当面下部に圏線らしきものが確認できるが、もともと細い線であり明瞭ではない。軒平瓦の顎部だけで瓦当面上部は失われているが、瓦当面の高さは5cmを超える大きめの瓦と考えられる。この顎部は約2.7cmと比較的厚めであり、形状からみて折曲技法による成形と推測される。軒平瓦Ⅱの図２－12・13と比べれば、直角に近い角度で折り曲げられている可能性がある。製作技法としては、軒平瓦Ⅱと共通性が高く、軒平瓦Ⅱとは文様的な部分での差異が考えられる。

ここで取り上げた軒瓦以外に、第13次調査ではさらに小さな軒丸瓦・軒平瓦片が数十点出土している。平泉町等2000は、それらはこれまで述べてきた瓦のいずれかに属するものとしているが、文様的なバリエーションが存在する可能性はあると思われる。

まとめ：花立Ⅱ遺跡で出土した軒瓦は次のとおりである。

軒丸瓦－軒丸瓦Ⅰ：素弁八葉蓮華文軒丸瓦
　　軒丸瓦Ⅱ：複弁八葉蓮華文軒丸瓦
　　軒丸瓦Ⅲ：素弁蓮華文系軒丸瓦
軒平瓦－軒平瓦Ⅰ：偏行唐草文軒平瓦
　　軒平瓦Ⅱ：均整宝相華唐草文軒平瓦
　　軒平瓦Ⅲ：宝相華唐草文系軒平瓦

軒丸瓦ⅠとⅡは、蓮子なしの扁平な中房をもつことで共通すると考えられる。中房径もほぼ同じであるが、素弁か複弁か花弁の形式が異なり、全体の推定径は軒丸瓦Ⅰが約19.4cm、軒丸瓦Ⅱは約17cmとなるものと考えられる（上原2001の図1－軒丸瓦Ⅱ復元想定図よりも径が小さい）。軒丸瓦Ⅰは12世紀の平安京の瓦よりも大振りであり、軒丸瓦Ⅱも巴文・剣頭文系の軒丸瓦（径10～12cm）と比べればかなり大型であるといえる。中房部を共有すること、胎土・焼成、一本造りであること、指オサエの多用など、製作技法的な共通点が多く、ほぼ同じ系譜にある軒瓦であると考えられる。一方、軒丸瓦Ⅲについては文様の様式、製作技法が異なり数量も少ないことから、在地工人等による補修瓦的なものと考えられる。

軒平瓦は一般に瓦当部の製作技法に年代や産地の特徴が現れるとされる。軒平瓦Ⅰは、瓦当部になる平瓦凸面端部に粘土を充てんして、指オサエにより顎部を成形したものと考えられる。瓦当幅は約25cmで、11世紀以降の軒平瓦では標準的なサイズだが、巴文・剣頭文系の軒平瓦（約21cm）と比べればひと回り大きい。軒平瓦Ⅱは、平瓦を折り曲げて瓦当部を成形したものと考えられる。図2－軒平瓦Ⅱ復元推定図（上原2001）によれば瓦当幅が28～29cm程度で、かなり大型の瓦であることが推測される。このサイズの瓦は丹波・播磨・尾張国系の軒平瓦に近いようである。軒平瓦Ⅲは、1点だけの破片で全体像の復元は難しいが、瓦当部の形状から軒平瓦Ⅱのバリエーションと推測される。軒丸瓦は、軒丸瓦Ⅲを例外とすれば、技法的な特徴は同一であると考えられる。

4　花立Ⅱ遺跡以外で出土した宝相華文・唐草文系の瓦

先に述べたように志羅山遺跡・泉屋遺跡等で宝相華文・唐草文系の軒平瓦が出土している。ここでは花立Ⅱ遺跡の瓦との関連性をみてみる。岩越二郎氏採集の宝相華唐草文軒平瓦は、毛越寺から平泉駅に至る道筋の、農家脇水路の洗い場所において、たわし台に転用されていた軒平瓦を採集したものである（岩越1958）。位置的に志羅山遺跡出土と想定される。これに類似するのは伽羅之御所跡第14次調査出土瓦で、比較すべきは軒平瓦Ⅱではあるが、文様的・技法的な共通性を認めることはできない。

図2－15は、泉屋遺跡第13次調査で出土した宝相華唐草文系の軒平瓦であるが、岩越二郎氏採集の軒平瓦と比べれば文様的な簡略化がみられる。断面図をみる限り瓦当部の成形技法は類似しているようであり、平瓦に顎を貼り付け指オサエで成形・調整する技法と推測される。図2－15の顎裏面の平瓦部の厚さが部分的に薄くなっており、やや異なる点もみられる。

図2－16は、柳之御所遺跡第36次調査で表土中から出土した宝相華文系の軒平瓦である。文様は蔓が省略され、花弁あるいは蕾・葉が展開するシンプルなもので、讃岐産の軒平瓦の文様に類似する様式である。この瓦は半折曲技法による瓦当部の成形であり、精良な胎土の硬質な瓦である。花立Ⅱ遺跡の瓦と比べ成形技法や焼成等の共通性はあまり見受けられない。

図2－17は、志羅山遺跡第66次調査で出土した唐草文系の軒平瓦である。沢整地層中から出土した瓦で、この文様の瓦は1点のみの出土である。文様の全体像は不明だが、蔓は太く明確である。瓦当部は折曲技法による成形であるが、瓦当部が薄く華奢な作りであることから、軒平瓦Ⅱとの共通性は少ないように思われる。唐草文系の軒平瓦は柳之御所遺跡から2点、観自在王院跡から1点ほど出土している。柳之御所遺跡の唐草文系の瓦は半折曲技法であり、図2－16の瓦に類似する可能性があるが、柳之御所遺跡・中尊寺伝大池の軒瓦に特徴的な2重圏線が入ること、胎土・焼成からみて、巴文・剣頭文系の瓦の一群に入るように思われる。

本澤2000は、前述の宝相華文・唐草文系の軒平瓦に加えて、柳之御所遺跡出土の複弁蓮華文と宝相華文の入る軒丸瓦について、花立Ⅱ遺跡第13次調査で出土した一群の瓦と「同じジャンルに属す」としている。

複弁蓮華文軒丸瓦と宝相華文軒丸瓦は花弁部のみの破片で中房部は不明である。中房部に三巴文が入る可能性もあり1点だけの出土ということもあるので、花立Ⅱ遺跡の瓦の一群に入れることは難しいと思われる。

岩越二郎氏採集瓦を典型とする宝相華唐草文系の瓦について、上原2001は清衡晩年（1120年代）のころの瓦としている。清衡晩年とするか2代基衡期とするかは現段階では留保するが、文様や成形技法等から、花立Ⅱ遺跡の蓮華文・唐草文系の瓦と柳之御所遺跡・中尊寺伝大池跡の巴文・剣頭文系の瓦の中間に位置づけられるものと考えられる。これらの瓦は、上原2001は、花立Ⅱ遺跡の瓦を製作した工人の系譜にあるが、在地に定着し独自の変化を遂げたものであり、金色堂の須弥壇や巻柱の蒔絵・螺鈿・飾金具等の宝相華文を模倣したものとしている。岩越二郎氏採集の軒平瓦中心部の宝相華文は、金色堂の螺鈿等ではなく、堂内具の金銅透彫華鬘（迦陵頻伽文）の宝相華文や、紺紙金銀字交書一切経の大般若経表紙の宝相華文にも似ているように思われる。文様のリアルさから言えば、一切経→華鬘・幡頭→軒平瓦→螺鈿の順ではないだろうか。

久保2006は、中尊寺の宝相華文により近いのは宇治平等院の宝相華文であるとし、70年の年月を隔てて似ているのは「手本にした」と考えるべきとしている。しかし、金色堂右脇壇（2代基衡を安置）の宝相華文は30年の間に著しく変形をきたした。これは、清衡の宝相華を写して変形したのではなく、12世紀平安京での変容が著しく進行し、それを（最新のもの）を取り入れたものと考えられるとしている。岩越二郎氏採集の軒平瓦の文様は、宇治平等院の宝相華文を手本としたとすれば、金色堂堂内具の文様を取り入れたものと考えることができる。しかし、それと異なる文様の瓦は、宝相華文系の瓦のモデルが平安京では存在しないことを確認した上でなければ、12世紀平泉内での変化云々は説明できないだろう。

宝相華唐草文系の瓦は、それぞれ特色がありグループ化は難しい。出土量もきわめて少なく、それに組み合う軒丸瓦の存在も知られていない。具体的な建物に伴うものでもない。巴文・剣頭文系の瓦出現以前に、志羅山遺跡内に瓦使用建物が一時的に存在したもので、建物廃絶後に何らかの理由で（道具として転用されて）、柳之御所遺跡・伽羅之御所跡・泉屋遺跡に移動したものの可能性が考えられるのではないだろうか。上原氏は、「平泉の地で独自の紋様展開を遂げている」としているが、私見ではもう一つの瓦製作の系譜が存在する可能性がある。これについては別稿で検討することとしたい。

次に、花立廃寺跡出土の瓦を検討してみる。前述のように出土瓦は保管施設の火災ですべて焼失している。概要は報告書（岩手県教育委員会1951）の記述に依拠せざるをえないが、それによれば完全なものや軒瓦等はなく、ほとんどが普通の覆瓦（丸瓦・平瓦）の小破片であること、北の袖の湿地帯から相当多数の瓦片が出土し、その次に多かったのは南の袖の部分及び本堂跡であること、瓦はいわゆる布目瓦で焼きは相当良よく、藤原期の他の遺跡から出土するものと同様であることが分かる。軒瓦は発見されなかった模様だが、「中に特異なのは千鳥らしい鳥形の文様をもった1片があること」を特記事項として述べている。報告書の図版に、おそらく平瓦凹面の布目の入る部分に鳥らしき文様が確認できるが、本澤2000は宝相華唐草文であろうと述べている。拓影を見る限り、鳥形というよりも宝相華文の一部とみる方が妥当であろう。凹部の布目に宝相華文を押捺するのは異例であるが、発見されなかった軒平瓦の文様を想定する材料にはなると思われる。

冨島2000は、郷土館（花立廃寺跡）から発見された瓦は花立13次調査の瓦と同系のものとしている。根拠は不明であるが、花立廃寺跡から出土した瓦は建物の礎石付近から出土したものであり、花立廃寺跡の屋根を葺いた瓦とみて差し支えないと思われる。軒瓦が出土しないのは、棟瓦として使われた可能性が高いといえるが、総瓦葺による軒瓦と丸瓦・平瓦の量比により軒瓦の割合が少なく、調査範囲で軒瓦が発見されなかった可能性も考えられる。瓦一括廃棄遺構が周辺部（花立溜池周辺・花立Ⅰ遺跡）で発見されることを期待したいが、現段階では検証することは困難である。

花立廃寺跡の建物遺構は神社跡よりも寺院跡の可能性が高いと思われる。「釈迦堂」かどうかはともかく、いわゆる花立廃寺跡の礎石建物が本堂（金堂）と仮定すれば、本堂を中心とする伽藍は周辺に及んでおり、花立溜池や花立Ⅱ遺跡第13次調査区を含んだ、中尊寺や毛越寺に匹敵する寺院組織が存在した可能性も考えられる。とりあえずここでは、志羅山遺跡等で出土する宝相華文・唐草文系の瓦と花立Ⅱ遺跡の瓦は共通性が少なく、年代と系譜が異なることを確認するとと

もに、花立Ⅱ遺跡の瓦は、隣接の花立廃寺跡の瓦と共通すると仮定して論を進めることとしたい。

5　瓦の系譜と年代の検討について

柳之御所遺跡・中尊寺伝大池跡から出土する巴文・剣頭文系の瓦は、在地の伝統との関係性は乏しく、12世紀の平泉に突如として出現したものと考えられていた（矢崎 1964・鎌田 1994）。9 世紀後半の胆沢城跡・瀬谷子窯跡群・明後沢遺跡群の瓦から 10 世紀国見山廃寺跡の瓦までの系譜を在地の伝統というのであれば、瓦の系譜は 10 世紀で一旦途絶したといえる。

花立Ⅱ遺跡の蓮華文・唐草文系の瓦は、胆沢城系の瓦との共通性はほとんどなく、12 世紀平泉に突如として出現したものと考えられる。花立Ⅱ遺跡の瓦は一定の製作技術によるもので、瓦専門工人による製品であることは確実である。11 ～ 12 世紀、浄土系寺院や邸宅等における瓦は、平安京とその周辺部で大量に消費された。12 世紀後半になって平安京の瓦は神戸や平泉、鎌倉へと伝播していったが（上原 1978・近藤 1985）、それは瓦生産体制の変化と政治的な権力の在り方に伴うものであった。

平安京が瓦の大量消費地であったこと、奥州藤原氏が平安京の文化を積極的に取り入れていたことを考慮すれば、花立Ⅱ遺跡の瓦の系譜を平安京に求めることは妥当性がある。平安京の瓦の系譜下にあることが検証できれば、瓦の年代は平安京の瓦使用の年代から導き出すことが可能になる。地方にいて平安京風の寺院や邸宅の屋根に瓦を葺くことを意図するならば、その当時の平安京で最新の様式の瓦を取り入れることになるだろう。

平安京の瓦を購入する場合は、特に依頼主の注文がない限り、現在生産しているもの（最新のもの）を購入することになる。当時、南都系瓦は一窯（瓦千枚）につき 20 石の米とされたので、奥州藤原氏の経済力から瓦の購入は難しい問題ではない。遠隔地という問題があるが、平泉で多く消費された渥美産の大甕の存在を考えれば不可能ではない。一方、鈴沢瓦窯跡の存在から、巴文・剣頭文系の瓦は、瓦専門工人を平安京から招き平泉で生産された製品であると確認できる。花立Ⅱ遺跡の瓦を焼いた窯跡は未発見であり、平泉産かどうかの検証は、窯跡の新規発見か科学的な胎土分析の結果を待つしかない。今後の瓦の系譜の検討作業で購入品（山城国・播磨国・讃岐国等産）か、瓦工人の出張製作品（平泉産）か、ある程度見通しはつくと思われる。

平安京とその周辺の瓦の年代は、文献と出土遺構の検証から実年代の想定が可能な場合がある。例えば、法勝寺金堂の建立の年代が記された文献と、法勝寺金堂の遺構と瓦がセットで確認できれば、法勝寺金堂の瓦の実年代を明らかにでき、その瓦を指標にして他の遺構の年代を推測することが可能である。今後（その2）において、花立Ⅱ遺跡の瓦と平安京とその周辺部出土の瓦を比較検討し、瓦の系譜と年代を推測してみる。それにより花立Ⅱ遺跡第 13 次調査の A 建物の年代が定まるだけでなく、隣接の花立廃寺跡の建立年代や性格等を推測することが可能になると思われる。

〔参考・引用文献〕

岩越二郎 1958 年：「平泉の寶相華文宇瓦」『史迹と美術』82 号　史迹・美術同攷會

岩手県教育委員会 1951 年：『平泉花舘遺址』岩手県文化財調査報告書第 1 輯

上原真人 1978 年：「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』13・14 号　（財）元興寺文化財研究所

上原真人 2000 年：「紙上報告／平安京からみた花立Ⅱ遺跡出土軒瓦の年代」『平泉文化フォーラム／瓦からみた平泉文化』平泉町・平泉町教育委員会

上原真人 2001 年：「秀衡の持仏堂－平泉町柳之御所遺跡出土瓦の一解釈－」『京都大学文学部研究紀要』第 40

上原真人 2010 年：「摂関・院政期の京都における丹波系軒瓦の動向」『佛教芸術』308 号

金子　智 2013 年：『みちのくの瓦／東北と三州をつなぐもの』高浜市やきものの里かわら美術館平成 24 年度特別展図録

鎌田　勉 1994 年：「柳之御所遺跡出土瓦からの一考察－平泉の瓦成立の系譜と年代及び使用形態について－」『財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要ⅩⅣ』

鎌田　勉 2006 年：「柳之御所遺跡出土瓦についての再検討～主に瓦の年代と使用方法について～」『岩手県立博物館調査研究報告第 23 号』岩手県立博物館

久保智康 2006 年：「中尊寺をかざる花、宝相華」中尊寺寺報『関山第 12 号』中尊寺

近藤喬一 1985年：『瓦からみた平安京』教育社歴史新書〈日本史〉40

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2006年：『柳之御所跡－一関遊水地・平泉バイパス建設関連第21・23・28・31・36・41次発掘調査－』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第228集

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1997年：『泉屋遺跡第10・11・13・15次発掘調査－』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第247集

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2000年：『志羅山遺跡第46・66・74次発掘調査－』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第312集

冨島義幸 2000年：「平泉・建築とその空間」『平泉文化フォーラム／瓦からみた平泉文化』平泉町・平泉町教育委員会

平泉町・平泉観光推進実行委員会 2000年：『第1回特別展 遺跡が語る平泉文化－柳之御所資料館－』

平泉町教育委員会 1974年：『鈴沢地区緊急発掘調査（略報）』

平泉町教育委員会 2000年：「伽羅之御所跡第14次」『平泉遺跡群発掘調査略報』岩手県平泉町文化財調査報告書第75集

平泉町教育委員会 2010年：「花立Ⅰ遺跡第29次」『平泉遺跡群発掘調査報告書』岩手県平泉町文化財調査報告書第114集

藤島亥治郎 1995年：『平泉建築文化研究』吉川弘文館

本澤慎輔 1992年：「平泉を掘る」『奥州藤原氏と柳之御所跡』吉川弘文館

本澤慎輔 2000年：「平泉出土の瓦」『平泉文化フォーラム／瓦からみた平泉文化』平泉町・平泉町教育委員会

前川佳代 2001年：「平泉の苑池－都市平泉の多元性－」『平泉文化研究年報第1号』岩手県教育委員会

矢崎靖子 1964年：「岩手県平泉中尊寺伝大池址周辺遺跡出土瓦について」『物質文化』